



基調講演

「歩きたくなるまち」を考える

藤井 聡 氏 (京都大学大学院工学研究科教授)



こんにちは。只今ご紹介いただきました京都大学の藤井でございます。今のご紹介にもありましたが、福井都市圏のパーソントリップ調査というのがございまして、都市交通戦略を考える委員会で、私が東京工業大学におりましたときにお手伝いさせていただき、福井市には年に数回寄せていただきました。京都に戻りまして福井は1時間と少しの距離ですので、ちょくちょく寄せていただいております。

今日はまちづくりフォーラム2010ということで、「歩きたくなるまち」を考えるというテーマでお話します。

私は京都大学におりました頃、1年間スウェーデンのイエテボリ大学に留学した経験がございます。そこでの経験から私個人の交通計画を考えるうえで非常に重要な原風景を与えられたので、その話から歩きたくなるまちについてお話ししたいと思います。

その辺りを先月出版した本がございまして、『正々堂々と「公共事業の雇用創出効果」を論ぜよ』というタイトルです。自己紹介をもう少ししますと、京都大学の土木科は大学ができた時からある科で、当時の内務省の行政のあり方を国づくりという点で考

えるということを主たる目的としています。昨今、公共事業に関して誤解が国民の皆様にあると感じ、世論の皆様の声高に申し上げることはありませんが、周りを見渡しますと、マスコミを通しておっしゃる方がいないので、土木工学の端くれの人間として公共事業のことを書いた書籍です。まず最初に、公共事業は雇用創出効果が莫大にあります。子供手当よりも大きな効果があり、この辺りを一切論じられないまま国債について議論されているところがあります。公共事業を削るのもいいのですが、公共事業に莫大な雇用創出効果があるということを考えながら、公共事業を考えてもらわないと困るということを学術的に申し上げます。また、デフレの時に増税ではなく、公共投資をすることが大事で、デフレを脱却すればインフレになり、GDPが大きくなって財政は少しずつ健全化していくという話をしています。また、どういう意味において道路が必要なのかという、ハードな公共事業の話など、一般の方にも理解していただけるよう、いくつかのエッセイを書きました。その中の1つに私の専門であるコンパクトシティがあります。

官を中心に民と協働して まちをつくる

歩きたくなるまちというのは本当に豊かに暮らすことが大事になります。現在の日本は病に侵されているところがあります。官を廃して民につけという、民業中心主義・民業ファシズムの流れがあります。もちろん、アダムスミスやフリードマンなど経済学者の自由放任主義で、国はマーケットを通じて秩序立てていくという考え方はあります。やはりバランスが大事です。民間に任せると、やっていただけることとやっていただけないことが当然ながらあります。やっていただけないことが0であれば、全部マーケットでいいのです。ところが、マーケットだからやっていただけないことがあります。それが一番分かりやすい例が、警察や軍隊。これは民間でやっていただけない仕事です。次に、国土計画や都市計画やまちづくり、これもなかなか民に任しているだけではうまくいきません。もちろん民間の活力を活用することは極めて大事です。逆に言うと、民間の活力を全く活用しない公的な行政活動は絶対に失敗します。しかし、行政的なパワーが必要だということがほとんど議論されていないように思えます。例えば、昔、この福井の駅前にはお城があり、まちというものは城下町として存在していたわけです。お城は当時の行政がやりました。武士は行政であり、政治家でありますから、お城を作るということは公共事業です。公共事業でこのまちはできました。官を廃して民につけというのではなく、官を中心に民間と協働してまちづくり、国を作ってきました。これが日本の

姿です。まちというものは最初、きっかけが必要です。それから後は行政の人間がコントロールするものでありません。あくまでも自然に自発的に民間の力でまちというものができあがっていくわけです。そうやって福井のまちも城下町がつくられてきました。

ところが、福井市全体の人口は当然増えていますが、中心市街地の人口は1/5くらいになっています。大きな商業施設を造り、まちが広がってしまいました。広がった時にまちを真ん中に収めようという政策がありました。しかし、戦後の政治行政の展開の中で、政府が前にしゃしゃり出るのはよくないというような風潮が5、60年脈々と続いています。どの時代も、とにかく民間中心にやっていかなければという考えの成れの果てが、日本全国でまちが郊外に広がっているということです。

車中心の便利なまちづくり

私の生まれは奈良県の生駒市です。生駒市は大阪という巨大都市があり、ベットタウンとしてできたまちです。私が子供の頃、昭和40年代は人口も少ない田舎でした。その当時は、我が家には車もありません。文房具を買いに行ったり、お菓子を買ったり、たこ焼きを買ったり、歩いて10分でした。昔はまちの中心に色んな商業施設がありました。しかし、昭和40年代後半から50年代以降、どんどん車に乗るようになりました。我が家も私が中学2年生の時に、ようやく車がやってまいりました。全ての家において車に乗るようになると、道路沿いに靴屋やおもちゃ屋など商業施設が

できます。すごいなと思っておりました。そうこうしているうちに、我が家の近くにあったスーパーがなくなりました。そのうち我が家の少し先にジャスコができ、みんなジャスコで買物します。ところがジャスコも3年前に潰れました。床面積の低いまちなかにあるジャスコは収益が低いからです。おじいちゃんおばあちゃんが住みづらくなり、それはすべての地域で起こっています。福井市も例外ではなく、中心部の人口が減少し、郊外に人々が住むようになりました。これはなぜかという、ほったらかしにしていたからです。車で便利になったからいいのではないかと感じています。寂しさを感じました。

歩くことで色んな発見がある

そんな時にスウェーデンのイエテボリ市にあるイエテボリ大学に留学しました。スウェーデンには人口800万人しかいません。第一の都市がストックホルム、第二の都市がイエテボリです。イエテボリ市は人口が30万人くらいで、福井市とそれほど大きく変わらない人口規模だと思います。私は、都心を囲む運河のすぐ外側のアパートに住みました。私の家は、見た感じ百数十年経っているような古い家です。そして、石で造られたヨーロッパのお城みたいな家が並んでいます。外見は古くても中は近代的で改装し続けています。そこから一歩出ると隣がイエテボリ一美味しい中華料理屋がありました。逆側の隣には陶器屋があって、少し歩くとカフェやパン屋や日本料理屋もありました。古いビルが立ち並んでおり、1階は商業施設で2階より上は住むと

ころになっています。また、運河の周りには芝生の公園が続いています。運河の公園以外にも自宅から1分程度でたどり着ける非常に大きな公園がありました。当時2歳半の子供を連れて行っていましたから、よくその公園に行きました。普段の食料品は、自宅から3分ほどのスーパーで買物ができ、7分ほど歩けば、もう少し規模の大きなスーパーがありました。イエテボリ大学までは徒歩で15分くらいでした。歩いて40秒のところに駅があって、そこから大学の前までトラム（市電）があります。国内出張の時は中央駅まで歩いて15分くらい、飛行機に乗る時も空港バスのバス停が歩いて5分くらいところにあります。よく歩きました。中心市街地に行くと映画館もありましたし、色んな洋服屋もあって楽しかったです。そういう暮らしを1年間しました。

私はそこに行くまで、気でも違ったかのように車に乗り続けていました。100m先のコンビニに行くにも当たり前のように車に乗っていました。しかし、1年間そういう暮らしをすると車に乗るという習慣がなくなります。そこで乗のをやめてみました。そうすると色んな発見がありました。私は、スウェーデンのイエテボリというまちがとりわけ素敵でわがまち京都の山科区はろくでもないしょうもないところだと思っていました。ところが歩くわけです。遊びに行くのも歩きます。そしたら色んなものがありました。神社がありました。公園がありました。色んな商店がありました。当然ながら車で行かないので毎日毎日買物に行かなくてはなりません。そうすると地元の人と仲良くなっていきます。そうすると気付かなかったものがいっぱいできてきま

す。先程、福井市のまち歩きの報告がありました。まさにあの現象です。車に乗るのをやめてみると、いいものがいっぱいあります。特に京都ですから非常に古いものもあります。小さい地蔵、大きい地蔵、神社、村山、子供なんかそこ遊びに行ったら山でずっと走り回ってますから楽しい。ちょっと入ったら池があるからそこでじゃぶじゃぶ遊んでます。どっちが楽しかったか。当時、車に乗るのが全ての基本です。したがって、大型ショッピングセンターの駐車場は込んでいます。車で行ってドライブしようとするところとそこが渋滞します。ご飯も便利です。安いところがありますから。そんな暮らしです。

一方、帰ってきてからどうか。近所にも食事するところがあります。近所に買物に行きます。同じところに何回も行きます。同じところを知れば知るほど味が分かってきます。明らかに私個人の山科というまちに対する愛着が格段に増えました。ポジティブスパイラルです。好きだから行く。行くから好きになる。行けば行くほど知り合いが増え、コミュニティもできあがる。近所付き合いもより広がります。どう考えてもいいことばかりです。わざわざ遠いところ行こうと思っていないので便利です。嫌なことがあるとすれば、70円のものを100円で買わなければならないというくらいです。その分ガソリン代で埋め合わせできているんじゃないかというくらいです。そして、家でご飯作りますから外に行くと色々見ているとお金使っちゃいますから。いらぬものがいっぱい増えて家が狭くなってしまいます。プラスチックの200円くらいのものを買って埋め尽くされている

よりも地元でぐるぐる回りながらスウェーデンから帰ってきてからの暮らしの方が圧倒的に豊かだと思いました。思い出してみると、実はみんなそう思っているんです。だからこそ3丁目の夕日という映画はすごく売れましたよね。みんなああいうノスタルジーをもっているんです。

人間が一番不幸に感じるのは人と人との繋がりが切れることです。色んな組織とか集団とかの繋がりが切れることが不幸です。車は我々に豊かさを与えたでしょう。物質的な利便性を与えたでしょう。しかしながら、車という閉ざされた空間に我が身をずっと埋め込むという移動形態を日常的に続けるということを通じて、我々と繋がっていた色々なものとの距離をぶちぶち切っていくんです。何が切れたか。隣近所が切れました。近所の商店街、そしてあろうことか地域の自然とも切れました。車に乗っていたら気持ちなんか分かりません。冬に寒くなったのも分かりません。雨のあの独特のにおいも分かりません。蝉の声もよく聞こえませんが、歩いてみると全部分かります。車は我々に物質的な豊かさを与えた一方で、色んな阻害をもたらしました。その阻害の起結は何かというと、まちが溶解しているということにマクロな現象で繋がっていることです。

100年かけてまちをつくる

みんなが車を使わなかったら、私は断言します、福井のまちは、未だに城下町として存在しているでしょう。商店街が賑わっているでしょう。我々はそういう事実に関

付いていないのではないか。スウェーデンに行って帰ってきて、山科の豊かな暮らしをしながら感じました。もう手遅れかもしれない。しかしながら、明日すぐ直そうとするから手遅れになると思うのです。我々は、生駒のまち、京都の山科のまち、そして福井のまちを何十年もかかって潰してきました。それを直すのが1日や2日でできるはずがありません。だとすると、同じくらいの時間を最低限かけないといけません。何十年もかければいいんです。2、30年かけて潰してきたなら、2、30年かけて直していけばいいんです。ただ、現実には当然ながらつくるのは時間がかかりますが、潰すのは一瞬だという話もあります。だから、今まで2、30年かけて潰したなら今度は100年かけて直していったらいいの

ではないかと思います。それを来年度とか5年以内の中期計画でとか思うから絶望します。人間の絶望というのは時間を走りすぎるからだと思います。自分一人が商店街に行くようになれば、一人分だけ豊かになります。それを100年間、ちょっとずつやっていったら、昔みたいなまちに、あるいは、全然違うまちかもしれませんが、昔のような素敵な新しい福井というものが100年分の時間をかけて生まれます。ぜひ、息の長い話として歩きたくなるまちをつくっていただきたいと思います。数十年、年百年、長い長いマラソンのようなものだから、そんな感じでまちづくりに取り組めば、絶望する精神から逃れられるのではないかと思います。